第 6 章　因果関係を表す複文における接続表現の使用と時間表現との関わり

第 5 章では、因果関係を表す複文における接続表現の使用と主語、述語動詞との関連性について検討を行った。本章では、日中両言語の因果関係を表す複文における接続表現と時間表現の関連性について考察していきたい。

時間表現とは、時刻や時間数を表すもの、テンス、アスペクト、時間的順序を表すものなどがあるが、本章では、日本語と中国語の因果関係を表す複文における接続表現の使用とテンスないしアスペクトとの関わりを取り上げて検討する。

日本語には、接続表現の使用はテンスの制約を受けるものと、まったく受けないものの何れもある。日本語の因果関係を表す複文の代表的な接続表現の「から／ので」はテンスの制約を受けない。時間的な前後関係が固定されず、従属節と主節の時間関係は、従属節事態は主節事態より、先行したり、同時になったりするだけではなく、後続したりする場合もあり、時間的な組み合わせは極めて自由である。それに対して、接続表現の「ため（に）」は構文上においては、従属節と主節との時間的な組み合わせは自由ではなく、テンスの制約を受ける場合がある。「て」に関しては、テンスを持たないので、本章では扱わないことにする。

中国語においては、語形変化によって表される時制がなく、接続表現の使用は、テンスの制約を受けることはなく、アスペクトの制約を受ける場合があることが推測される。

本章では、両言語の接続表現の使用がそれぞれどのような時間表現の制約を受けるのか、また、どのような機能を持つ接続表現が制約を受けやすいのか、どのような言語環境において制約を受けるのかについて究明した上、両言語の接続表現の使用と時間表現との関連性の異同を明確化したい。

6.1 先行研究および研究方法

6.1.1 日本語の先行研究について

日本語では、因果関係を表す複文における接続表現の使用と時間表現との関連性についての研究は少なくない。中でも、従属節のテンスの形式についての研究がより多く見られる。まず、井上(1976)[1)]が挙げられる。井上は従属節の述語が状態性述語であれば、

ル形で表せず、タ形でなければならないとしている。井上は「から・ので」を取り上げ、「時制一致」という側面から分析を行った。井上の記述をまとめると、以下のようになる。用例番号は本章の番号順で示す。

① 従属節が「＋状態」述語の場合は、時制が一致していない文は不適格である。

(1) 彼は金が＊あるから／あったから、子供を留学させた。

(2) 加藤氏は＊健康だから／健康だったから、忙しい日程をこなせた。

ただし、従属節が現在も変わらない状態を表す場合には、「時制一致」が見られない。

(3) この役所は忙しいから、アルバイトを雇った。

② 「～ている」が進行状態相を表す時にも原則として、従属節では時制の一致がなければならない。

(4) 太郎は原稿を ＊書いているから／書いていたから、電話に出なかった。

③ 反復状態相の「～ている」も、時制の一致を必要とする。

(5) 私は、通学に新幹線を ＊利用している／利用していたので、交通費にずい分かかった。

井上の記述に対して、岩崎（1995）[2)] は従属節の述語が状態性の述語である場合、「時制一致」としているところに問題があり、容易に反例が見つかると指摘している。岩崎は以下のような反例を挙げている。

(6) 山本屋があまりぴったりと元の位置にあるので、見たとたん妙な気がした。

(7) ぼくはいっしょうけんめい耳をすましたが、けっきょく少しもわからないのでおじさんにたのんだ。

従属節の述語が状態性述語である場合、テンスの形式はル形も許容されることについては、岩崎より前の先行研究においても言及されている。寺村（1982）[3)] は、以下のように述べ、例を挙げている。

状態性の述語の場合、ＰとＱが同じ時に共存する事態であるときは、Ｑが過去ならばＰは基本形でも許容されるのがふつうのようである。

（中略）

(8)　小サイ店 ｛ダ／ダッタ｝｛ガ／ケレドモ｝ヨク繁昌シテイル

(9)　声が ｛小サイ／小サカッタ｝｛カラ／ノデ｝ヨク聞コエナカッタ

寺村の記述によると、従属節の述語が状態性の述語である場合は、ル形でもタ形でも表すことができるということがわかる。

岩崎は（1995）では従属節のテンスと視点について検討し、さらに岩崎（2001）[4)]では従属節と主節の時間関係に着目し検証を行った。岩崎（2001）では、「から／ので」文の従属節と主節の時間的前後関係の組み合わせと、従属節の述語の形と主節の述語の形による組み合わせを以下のように示している。

・従属節と主節の前後関係の組み合わせ

①	従属節事態先行	従属節事態	→	主節事態
②	従属節・主節事態同時	従属節事態	＝	主節事態
③	従属節事態後続	主節事態	→	従属節事態

・従属節の述語の形と主節の述語の形の組み合わせ

（Ⅰ）従属節：タ形／主節：タ形

（Ⅱ）従属節：ル形／主節：タ形

（Ⅲ）従属節：ル形／主節：ル形

（Ⅳ）従属節：タ形／主節：ル形

岩崎によれば、従属節の述語と主節の述語の組み合わせにおいては、ひとつのパターンにおいての時間的な関係は決して一通りではなく、述語の属性などによって、従属節と主

節の時間関係は、従属節事態が先行する場合もあれば、従属節・主節事態同時になったりする場合もあるという。岩崎(2001)では従属節と主節のテンスが複雑であることが示唆されている。

6.1.2　中国語の先行研究について

中国語の時制に関する研究は近年増えてきた。遡ると、まず、張秀（1957）が挙げられる。張(1957)は「現代中国語には関係時制（すなわち相対時制）は存在しているが、絶対時制は存在していない（文法形式ではなく語彙形式で表す）」と結論付けている。

これに対して、C. E. ヤーホントフ（1957）は、「中国語におけるテンスの範疇は、アスペクトのニュアンスが追加されることによって複雑になっており、単なるテンスとしてではなく、むしろ混淆したアスペクト的テンスの意味を有する範疇となっている」と主張している。

また、吕叔湘(1982)、李临定（1990）、范晓(2003)では、絶対テンスと相対テンスに関して解釈し、テンスの存在を認めている。さらに、李铁根（1999）では、中国語の動態助詞の“了，着，过”の働きについて分析し、“了，着，过”[5)]はテンスを表す機能とアスペクトを表す機能を同時に持っているという結論を出している。

テンスとアスペクトの関係について、龚千炎（1995）[6)]においても次のように記述されている

> 事实上，“时（tense）” 和 “态（aspect）”虽然是两个不同的时间概念，但却都是时间系统的一个方面，常有重合交叉之处。
>
> 実際は、「テンス」と「アスペクト」とは異なった時間の概念であるが、それぞれが時間範疇の側面のひとつであるため、重なり合い、交叉することがよくある。

以上のように、中国語にはテンスが体系的に不完全であるといった記述もあれば、テンスとアスペクトが混淆している、または重ねあい、交叉することがよくあるといった記述もある。しかしながら、中国語は古来語形変化を持たないため、現代中国語においても、時制が存在するか否かという点については、まちまちであり、今日に至っても時制が存在するといった論述はまだ定説になっていない。

これまでの中国語複文に関する研究において、接続表現の使用とテンスとの関わりについての研究はほとんどない。多くの文法著書では、因果関係を表す複文の特徴について論じる際、従属節と主節で述べられる内容は、既に実現した事実であるとしている。つまり、因果関係を表す複文の成立は、従属節と主節が「已然態」でなければならないということである。これに対して、邢（2001）[7]では、因果関係を表す複文における従属節と主節のアスペクト的な組み合わせは、以下の４通りがありうると述べている。ここでは序章と第３章において既に提示した邢（2001）の記述を再掲する。

「因果式」は一般的には已然の「因果関係」を表すが、原因と結果はすべて已然表現であるとは限らない。次の３種類の場合がある。

・「原因」は已然であるが、結果は未然である。

・「原因」は未然であるが、結果は已然である。

・「原因」は未然であり、結果も未然である。

邢（2001）では接続表現の使用と時制との関わりについて言及せず、従属節と主節における「已然態」と「未然態」の組み合わせについて述べている。邢（2001）によると、中国語の因果関係を表す複文では、単なる「已然態＋已然態」ではなく、「已然態＋未然態」「未然態＋已然態」「未然態＋未然態」のいずれもが成り立つと言う。

両言語の先行研究から見ると、因果関係を表す複文における接続表現の使用は拘りが異なっていることが判明した。つまり、日本語は時制に拘泥しているのに対して、中国語は語形変化を持たず、「時」の語法カテゴリーが形成されておらず、アスペクトに拘泥している。したがって、本章では、両言語の接続表現の使用と時間表現との関わりについて考察する際、両言語のそれぞれの拘泥する点に限って、分析し検討を行うことにする。すなわち、日本語については接続表現の使用と時制との関係に着目して検討するのに対して、中国語については、接続表現の使用とアスペクトとの関係に着目して検討するということである。

6.2 日本語の接続表現の使用と時制との関わり

日本語の接続表現の使用と時制との関わりについて検討する際、岩崎（2001）の分類に

従うが、パターンの表示方法を以下のように示すことにする。本節においては、接続表現の使用とテンスとの関連性を述べると同時に、各パターンにおける従属節と主節の時間関係についても検討を行う。

① 「Ｐタ ⇒ Ｑタ」型
② 「Ｐル ⇒ Ｑタ」型
③ 「Ｐル ⇒ Ｑル」型
④ 「Ｐタ ⇒ Ｑル」型

ここでいう「ル」形と「タ」形は動詞に限らず、他の品詞の過去形と非過去形も含む。

6.2.1 「Ｐタ⇒Ｑタ」型

日本語の「Ｐタ⇒Ｑタ」における接続表現の使用は、もっとも自由度が高いと思われる。日本語では、「Ｐタ形 ⇒Ｑタ形」の用例が非常に多く見られ、中では「から」文、「ので」文、「ため」文のいずれも観察される。

(10) 竹神まできた道のりが遠かったために疲れていた。 『越』
(11) 考えていたことであったので、わたしはほとんど愕かなかったが、 『挽』
(12) かの山の空はまだ夕焼の名残の色がほのかだったから、窓ガラス越しに見る風景は遠くの方までものの形が消えてはいなかった。 『雪』
(13) 月が西に傾いたので、白い光りの一帯は半切ほどに細くなった。 『吾』
(14) 車窓から吹きこんで来る風が寒かったので、杏子は窓を閉めた。 『あ』
(15) 友人が遊びに来たので一所に散歩に出掛た。 『吾』
(16) 玉枝の病気は、二どめに喜助が訪ねたとき、見ちがえるようによくなっていた。それは、喜助がきたために、快方にむかったのだとでもいいたいほど、肉づきもよくなっていた。 『越』

上掲した用例では、従属節と主節の述語はすべて「タ」形になっており、述語は状態性を持つ述語と動作性を持つ述語の２種類が含まれている。(1)～(10)の用例の従属節述語と

主節述語の属性による組み合わせは、次の「ａ」「ｂ」「ｃ」「ｄ」の４種類に分類できる。

ａ．Ｐ：状態性述語　⇒　Ｑ：状態性述語
ｂ．Ｐ：状態性述語　⇒　Ｑ：動作性述語
ｃ．Ｐ：動作性述語　⇒　Ｑ：動作性述語
ｄ．Ｐ：動作性述語　⇒　Ｑ：状態性述語

状態性述語には形容詞の過去形、動詞の「ていた」形や心理動詞の「タ」形などによるものが含まれている。動作動詞には持続性のある動詞と持続性のない動詞が使用されている。上掲用例では、「Ｐ状態性述語⇒Ｑ状態性述語」の「ａ」類にあたるものは、(10)の「ために」文、(11)(13)の「ので」文、(12)の「から」文である。状態性を持つ述語は、形容詞の過去形によるもの、ナ形容詞の過去形によるもの、動詞の「ていた」形によるものなどが使用されている。「Ｐ：状態性述語⇒Ｑ：動作性述語」の「ｂ」類にあたるのは、(14)の「ので」文である。（14）の「ので」は「から」、「ため」と置き換えても、ニュアンス的な違いがあるが、極めて自然な文になる。

(14’)　車窓から吹きこんで来る風が寒かったから、杏子は窓を閉めた。
(14”)　車窓から吹きこんで来る風が寒かったため、杏子は窓を閉めた。

「Ｐ：動作性述語⇒Ｑ：動作性述語」の「ｃ」類にあたるのは(15)の「ので」文であるが、「から」文、「ため」文に置き換えても差し支えない。

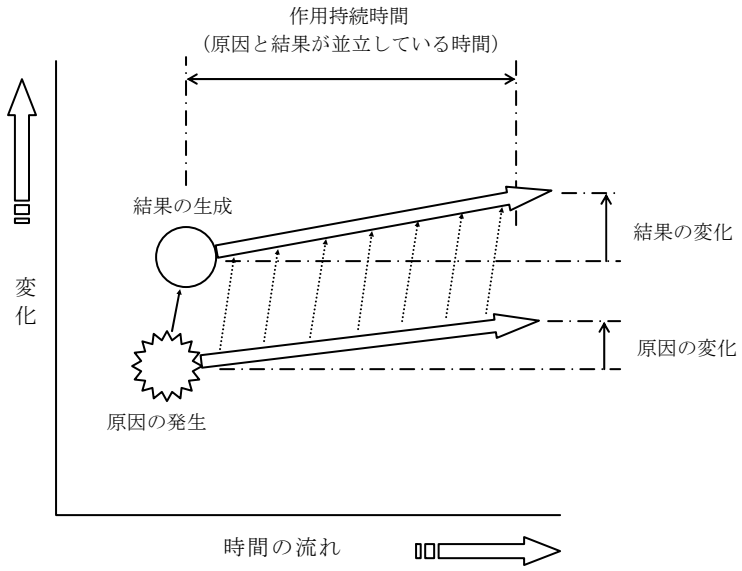
「Ｐ：動作性述語⇒Ｑ：状態性述語」の「ｄ」類に属するのは(16)の「ために」文である。言うまでもなく、「から」「ので」文と置き換えられる。

このように、従属節と主節の時制の形式が何れも「タ」形である場合、述語の性質の制約を受けず、「ので」「から」「ため（に）」は基本的に置き換えることができるということがわかる。ただし「Ｐタ⇒Ｑタ」型の場合、前後節の時間関係を見ると、従属節事態が主節事態に対して、決してすべて相対的に以前のことではないことに気付く。ここで、述語の性質によって、前後節の時間関係が異なってくることにも注目すべきだと思う。

岩崎（2001）では、従属節と主節の述語がともに「タ」形である場合、従属節の述語が動作動詞であれば、従属節と主節の時間関係は従属節事態先行になり、状態動詞であれば、多くの場合は従属節・主節事態同時を表すが、従属節先行を表すものも若干あると指摘されている。

上例の中では、従属節先行と従属節・主節同時のいずれのケースも含まれている。(10)(11)(14)の従属節の述語は状態性述語であるが、持続性を持たないため、従属節事態の発生が主節より以前であり、従属節が先行となる。(15)(16)の従属節の述語は動作性述語であるため、従属節事態の発生は主節事態より相対的以前となり、従属節と主節の時間関係は従属節先行となっている。これに対して、(12)(13)の場合は、描写文であり、(10)(11)(14)と同じく、従属節に状態性述語が使用されているが、文の性質は異なっている。この種の文は、従属節事態と主節事態は目の前に存在している状態であり、それぞれ持続性を持つものであるため、従属節事態と主節事態が同時に存在しているか、または同時に変わっていくといった時間的関係をもつ。このような場面描写は、同じ空間にあるいくつかの場面を言葉で描き出し、その場面にある状態が自然に関係し合い、変わっていくのが特徴だと言える。

たとえば、(12)の従属節の「かの山の空はまだ夕焼の名残の色がほのかだった」という状態と、主節の「窓ガラス越しに見る風景は遠くの方までものの形が消えてはいなかった」という状態は、同時に書き手の目に映る情景であり、この二つの情景は自然に関係しあって変わっていく。つまり、夕焼の名残の色が段々変わっていくにつれて、窓ガラス越しに見る風景も段々変わっていくということになる。このように、場面描写文における従属節事態と主節事態は、従属節事態が主節事態に影響を与えつつあり、主節事態が従属節事態から影響を受けつつあるといった同時進行の時間関係になっている。(13)も同様に解釈できる。このような時間関係を図示すると、以下のようになる。



【図14】従属節と主節における同時進行の時間関係

このように、日本語では、従属節の述語と主節の述語が「タ」形である場合の従属節と主節の時間関係は、従属節が先行しているものと、従属節先行から従属節と主節が同時に進行し変わっていくものがあるということが判明した。また、従属節に同じく状態性述語が使用されているとはいえ、述語が持続性を持つものであるか否かによって、前後節の時間関係が変わってくるということも判明した。

6.2.2 「Ｐル⇒Ｑタ」型

(17) 気にいった生地が二つ三つ目についたが、山名洋裁店以外では購入できないという立場にあるので、いかんともし難かった。 『あ』

(18) 爆音が聞えるので浅二郎さんは仲間の庄吉さんと一緒に橋の下へ逃げこんで、そこに繋いであった苫船のなかに隠れた。 『黒』

(19) 何のことやらわからぬといった顔をしているので、里子は慈海の言葉をひきとって説明した。

(20) その翌日は芒種の日に当るので、重松は農家の戸主のお勤めとして百姓道具を整理した。 『黒』

(21) 給仕をしながら下女がどちらから御出になりましたと聞くから、東京から来たと答えた。 『坊』

(22) 「あかん、あかん、退却じゃ」と与田さんが手を引張るので、何もかもうっちゃって一緒に己斐町の方へ逃げて行った。 『黒』

上掲用例の従属節の主節のテンスの形式はいずれも「Ｐル⇒Ｑタ」型になっている。これらの例を観察すると、従属節事態が主節より先に起こる場合、本来は「Ｐタ⇒Ｑタ」によって表すが、「Ｐル⇒Ｑタ」型によって示すケースも多くあるということがわかる。

「Ｐル⇒Ｐタ」型の場合は「Ｐタ⇒Ｐタ」型より事情が複雑である。中には、ル形でありながら、従属節事態が主節事態に先行することが表せるものと、表せないもののいずれのケースもある。「Ｐル⇒Ｐタ」型においては、「から」「ので」と「ため(に)」はテンスとの関わり方に明らかな違いが見られる。「から」「ので」の場合は、従属節事態が先行してもしなくても、まったく影響を受けず使用できるのに対して、「ため」の場合は、述語が動作性を持つものか、または状態性を持つものかといった述語の性質の制約を受けると同時に、従属節事態が主節事態に先行しているか否かといった事態発生の時間的なプロセスの制約も受ける。

上掲用例の中では、（17）の前後節の述語の組み合わせは「Ｐ：状態性述語⇒Ｑ：状態性述語」となっており、従属節の述語は状態動詞の「ある」が使用され、テンスの形式はル形であっても、「ので」を「ため（に）」に置き換えられる。（18）の前後節の述語は「Ｐ：状態性述語⇒Ｑ：動作性述語」といった組み合わせになっており、従属節の述語は状態性を持つものであるが、持続性を持っていないため、「ので」を「ため（に）」に置き換えると、自然さを損なってしまう。(19)の前後節の述語の組み合わせは（18）と同様であるが、従属節の述語は「ている」形式になっているため、「ので」を「ため」に変えても差し支えない。(20)も「Ｐ：状態性述語⇒Ｑ：動作性述語」になっているが、従属節事態は主節事態の後に起こることになっており、「ので」と「ため（に）」との置き換えが許されない。

(20) ＊その翌日は芒種の日に当るため(に)、重松は農家の戸主のお勤めとして百姓道具を整理した。

従属節事態が主節事態後に起こる場合、「ため(に)」の使用が許容されない理由に関して、

于(2000)[8]は、「ため（に）」を継起性に従うものとしており、以下のように記述している。

> 二つの出来事を、発生の前後に従って先行・後続の順序に並べる客体的表現の「タメニ」文は基本的に、継起性に基づいて前因・後果的に因果関係を表しており、従属節と主節の時間関係は相対的テンスとも絶対的テンスとも異なる継起関係をなしている。その継起性に特徴づけられて、「タメニ」文は、話者の心的態度の表出を排除する自然発生的な因果性を優先させる性格が強く、従属節と主節を、継起的な発生という時間の制約から離れて内容的に分断することはできない。

于(2000)によると、「ため（に）」文の成立条件は従属節と主節の時間関係が先行・後続でなければならないと言う。

(21)(22)は「Ｐ：動作性述語⇒Ｑ：動作性述語」といった組み合わせであり、「ので」「から」の使用はいずれも許されるが、「ため（に）」との置換が許容されない。その理由については、寺村(1984)[9]では、「ため(に)」と結びつくテンスの形式について次のように述べている。

> 「原因」を表わす「タメニ」と結びつくＰは、意志動詞でも非意志動詞でも、形容詞でもよい。だいたい、～テイル形や過去形のことが多いが、意志動詞は基本的には使えないといってよいだろう。

寺村(1984)の記述によると、従属節の述語が動作性述語であり、テンスの形式が基本形である場合、「ため(に)」の使用に適さないということがわかる。

ここまでの分析を通して、「Ｐル⇒Ｑタ」型の場合、従属節の述語のテンスが基本形であるため、「ため(に)」の使用は従属節の述語の性質または従属節と主節の時間的な発生順序の制約を受けることが明らかになった。

「Ｐル⇒Ｑタ」型における前後節の時間関係は、従属節先行、従属節後続、従属節・主節同時といった時間関係のいずれも観察される。(17)(18)(19)の従属節の述語は「ある」「聞こえる」「している」といった状態性述語が使用されているが、「ある」「している」は持続性を持つものなので、従属節・主節事態同時を表していると言える。それに対して

「聞こえる」は持続性を持たないものであり、「聞こえた後」に、主節である行動が行われ、前後節の時間関係は従属節先行になっていると思われる。(20)では従属節事態は主節事態の後に起こるため、従属節事態後続を表すこととなる。（20）に関しては、従属節事態後続であるが、発話時においてはすでに過去のものだと考えてもよい。つまり、従属節のル形は、相対的テンスだと考えられる。

「Ｐル⇒Ｑタ」型においては、実際に従属節のテンスはル形でありながら、従属節事態が主節事態より前に起こることを表しているケースも多くある。つまり、従属節事態が主節に先行することとなる。(17)～(23)の用例の中では、従属節事態先行になっているのは(21)(22)である。これらが従属節先行になるのは、従属節と主節の主語が異なっており、従属節述語が動作性述語だからである。従属節事態が先行する「ルノデ・ルカラ」文の特徴については、岩崎(1994) [10] には、以下のように記述されている。

① ノデ節、カラ節に示されている事態は、主節の主語なる人物による観察を表している。
② 主節の主語なる人物はその観察を主節にさしだされる動作の理由としている。

岩崎の記述によると、(21)(22)前後節の時間的関係が従属節先行となる理由について解釈できる可能性を指摘する。

以上、「Ｐル⇒Ｑタ」型における接続表現の使用とテンスとの関わりについて検討し、従属節と主節の時間関係についても分析を行った。結果としては、接続表現の使用は単なる従属節の述語のテンス形式を受ける場合があるだけではなく、従属節の述語の性質の制約を受ける場合もあることが分かった。従属節と主節の時間関係も従属節の述語の性質によって異なってくる場合もあれば、前後節の時間的な発生プロセスによって異なってくる場合もあるということが判明した。次に、「Ｐル ⇒ Ｑル」型について検討してみる。

6.2.3 「Ｐル⇒Ｑル」型

「Ｐル⇒Ｑル」型の場合は従属節のテンス形式と主節のテンス形式はともに基本形になっており、「ため（に）」の使用は従属節の述語の性質によって、制限を受けるケースと受けないケースが存在することが予想される。

(23) もともとここは温泉町であるから、芸者はいる。 『越』

(24) 石灰石であるために滑りやすい。 『金』

(25) 日が強いので水がやに光る。 『坊』

(26) フレヤーは適当に取ってあるので、スカートの感じもゆるやかで上品である。 『あ』

(27) 僕と矢須子は、会社へ勤めているから会社の食堂で食事をする。 『黒』

(28) 母は毎月要るだけのものは父から取り上げるから、さして不自由はしない。 『あ』

(29) 虫供養は芒種の次の日にする行事である。百姓は野良仕事をするから地の底の虫を踏殺すので、お萩をつくって今は亡き虫類を供養する。 『黒』

(23)～(29)の前後節のテンスはいずれも基本形になっている。(23)(24)(25)(26)の従属節述語と主節述語の組み合わせは「Ｐ：状態性述語⇒Ｑ：状態性述語」になっており、従属節と主節のテンスが基本形でありながら、「から・ので・ために」のいずれかの使用が許容される。(27)の前後節の述語は「Ｐ：状態性述語⇒Ｑ：動作性述語」になっており、「ている」が使用されているので、「から」を「ため(に)」に置き換えても意味的には違和感を覚えない。(28)(29)の前後節の述語は「Ｐ：動作性述語⇒Ｑ：状態性述語」「Ｐ：動作性述語⇒Ｑ：動作性述語」といった組み合わせになっており、従属節に動作性述語を使用されており、「ため(に)」との置き換えは許容されない。

前後節の時間関係についてみると、「Ｐ：状態性述語⇒Ｑ：状態性述語」になっている(23)(24)(25)(26)のいずれも前後節の時間関係が従属節・主節事態同時を表している。前後節の述語は「Ｐ：状態性述語⇒Ｑ：動作性述語」になっている(27)の場合は、従属節・主節述語によって表された事態は一回きりのことではなく、習慣的なことであるため、従属節・主節事態同時を表していると考えられる。従属節のみに動作性述語が使用されている(28)は従属節内に「毎月」という言葉が使用されることによって、従属節事態は一回きりの出来事ではなく、繰り返される出来事だと判断できるため、従属節と主節の時間関係は従属節・主節事態同時だと考えられる。従属節と主節ともに動作性述語が使用されている(29)については、従属節・主節が表している出来事は毎年行われている行事であり、習慣的なものであるため、従属節と主節の時間関係も同時になっていると言える。

以上の分析によると、次のようなことがわかる。従属節と主節のテンスがともに基本形になっている場合は、従属節述語と主節述語が状態性のものであれば、「から」「ので」「ため(に)」のいずれの使用ケースもある。また、主節に動作性述語が使用されるとはい

え、従属節述語が持続性のある状態性述語であれば、「ため(に)」の使用も許容される。一方、従属節に動作性述語が使用される場合、「ため(に)」の使用は許容されない。前後節の時間関係に関しては、従属節に状態性述語が使用される場合は前後節の時間関係は従属節・主節同時を表している。しかしながら、従属節に動作性述語があっても、従属節事態が習慣的または繰り返し的な出来事であれば、前後節の時間関係も従属節・主節同時だと考えられる。

6.2.4 「Ｐタ⇒Ｑル」型

「Ｐタ⇒Ｑル」型の場合は、従属節のテンス形式と主節のテンス形式はタ形とル形の対立となっており、タ形が先に来るということは、従属節事態が主節事態より先に起こるのが当然である。

(30) 宿屋へ五円やったから財布の中には九円なにがししかない。 『坊』

(31) 喜助は温泉街を歩いていった。人通りは多かった。雪がとけたので近在からどっと押しよせてきた湯治客である。 『越』

(32) 女が、ランプを持って行ってしまったので、万事手さぐりだ。 『砂』

『黒』

(33) 工兵隊はピカドンで死人を無数に出したので、白島から流れて来る川の洲に死体を井桁型に積み重ねて火をかけている。 『黒』

(34)「私」の恋人で、享楽的な庵原はまえは、結核の重い症状を知りながら病院を抜け出して、ホテルで一夜を「私」と過したために、急速に病状が悪化してしまう。

『近代』

(35) 廊下で九一色先生に逢ったので立ち話をする。 『黒』

(36) 幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったので、今だに親指は手に付いている。然し創痕は死ぬまで消えぬ。 『坊』

(30)～(36)の中には、従属節に状態性述語を使用するものと、動作性述語を使用するもののいずれもある。従属節述語のテンス形式がタ形であるため、接続表現の使用は述語の性質の制約を受けにくくなり、「から」「ので」だけではなく、「ため(に)」の使用

も許容される。また、従属節事態と主節事態の時間関係について言うと、従属節の述語の過去形と主節の述語の基本形が対立しており、従属節事態の発生が明らかに主節の前で起こったこととなっているため、述語の性質とは関係せず、前後節の時間関係は従属節先行だと言えよう。

6.3　中国語の接続表現の使用とアスペクトとの関わり

中国語においては、語形変化を持たないため、アスペクトがどのように表現されるかなどについて、分析に入る前に説明しておきたい。

6.3.1　中国語のアスペクトの表現形式および分類

6.3.1.1 アスペクトの表現形式

中国語では、アスペクトを「時態(aspect)」と呼んでいる。中国語は日本語とは異なり、形態変化に乏しいため、アスペクトは動詞の形態的な変化によって表さない。アスペクトを表す形式は、「時態助词(アスペクト助詞)」による方法だけではなく、「時態副词(アスペクト副詞)」などによるケースも多くある。語彙によって表すため、アスペクトを表す表現はバラエティに富んでおり、大まかに 4 種類に大別される。

① 時態助詞（アスペクト助詞）

中国語では、動詞の後ろに「時態助詞」の“着、了、过”などを付けることによってアスペクトを表すのが主な表現形式である。「動詞＋了」は過去（完成）の出来事を、「動詞＋着」は現在（進行中）の出来事を、「動詞＋过」は経験したことまたは動作の完了を表す。

② 準時態助詞（準アスペクト助詞）

「時態助詞」の機能に類似するものであり、実意を持つ動詞から転化してきたものである。動作の開始或いは状況の変化を表す“起来”、継続を表す“下去”なども挙げられる。

③ 時態語気助詞（アスペクト語気助詞）

文末表現として使用されているが、アスペクトを表す手段の一種だともみなせる。文末に使用する“了”と“来着”が挙げられる。文末表現として使用されている“了”はある変化の完成を表し、“来着”はすでに過ぎたことまたは近頃経験したことを表す。

④ 時態副词

“時態副词(アスペクト副詞)”の使用によって完成相、経験相、進行相などを表す。已然のアスペクトを表す“已经(すでに)”、経験相を表す“曾经（かつて）”、動作の進行と状態の持続を表す“在、正在、正”、未然のアスペクトを表す “将要”“要”が挙げられる。

6.3.1.2 アスペクトの分類

アスペクトの分類に関しては、様々な説がある。吕叔湘(1944)では、“時態（aspect）”を“动相(動相)”と称し､13 類に分類している。赵元任(1968)では“時態（aspect）”を“动态(動態)”と呼び､7 種類に分類している。张志公(1982)においても､“時態(aspect)”を“动态(動態)”と呼んでいるが、“尚未完成（まだ完成していない）”と“已经完成（既に完成した）”の 2 種類に大別している。龚千炎(1995) [11] では現代中国語のアスペクトの分類を先行研究を踏まえながら、「時態助詞、時態副詞、時態語気詞」の機能を考慮し、以下の 8 種類に分類している。

① 完成・実現アスペクト　　⑤ 開始アスペクト
② 経歴アスペクト　　⑥ 継続アスペクト
③ 近経歴アスペクト　　⑦ まさに起こそうとしているアスペクト　(未然出来事)
④ 進行・持続アスペクト　　⑧ まもなく起こそうとしているアスペクト (未然出来事)

龚千炎(1995)では、現代中国語のアスペクトについて細分類を試みている。実に多様なアスペクトであるが、それを「已然のアスペクト」と「未然のアスペクト」の２種類にまとめることができる。ここで言う「已然態」と「未然態」を大河内（1967）[12] に基づき以下のように規定する。

「已然態」はすでに行われたもの、すでにあったものというだけではなく、たとえ行

われていなくても、行われることが明確に実証されているものも含めることにする。同様に、「未然態」についても、「行為・行動として未然である」というだけではなく、それが行われることが「未実証、未確認である」ことを含むものとする。

上記の定義によると、「已然態」は幅広く、完了相だけではなく、進行相、持続相、継続相、経歴相なども含まれることがわかる。

6.3.2　4つの分類における接続表現の使用とアスペクトとの関わり

ここで、邢（2001）の従属節と主節における「已然態」と「未然態」の組み合わせについての記述に従い、以下の４つのパターンに分類し、各パターンにおける接続表現の使用とアスペクトとの関連性について考察する。

①　“Ｐ已然 ⇒ Ｑ已然”型
②　“Ｐ已然 ⇒ Ｑ未然”型
③　“Ｐ未然 ⇒ Ｑ已然”型
④　“Ｐ未然 ⇒ Ｑ未然”型

6.3.2.1“Ｐ已然 ⇒ Ｑ已然”型

中国語の因果関係を表す複文において、“Ｐ已然 ⇒ Ｑ已然”型は最も典型的なものである。前後節とも事実であることについて述べており、極めて客観的であるため、因果関係を表す機能を持つもの、因果関係を表すと同時に継起関係も表す機能を持つもの、接続機能のみを持つもののいずれの使用ケースも見られる。分析にあたって、用例の中のアスペクトマーカーは一重波線によって示す。

［37］(因)新娘子到了，亲友们也差不多到齐了，(結)于是新房中的那张折叠桌便被抬至了中央，并且张开了翅膀（从方变圆），准备着承载第一次光荣的负荷。　《钟》
花嫁が到着した。客もほとんどそろった。そこで新婚夫婦の部屋にある例の折り畳み式のテーブルが真ん中に運ばれた。晴れのお役目というところだ。　『鐘』

[38] ㈧她觉得自己没有力量支持了，㈱便坐下去，坐在地上。 《家》

もう自分を支える力がなくなって、彼女はべったりと地面へ坐ってしまった。 『家』

[39] ㈧后来骂我的人也被警察剪去了辫子，㈱我就不再被人辱骂了； 《呐喊》

その後ぼくに悪態をついた連中もお巡りに弁髪を切られたので、それからはもう、悪態をつかれることはなかったが。 『呐喊』

[40] ㈧每个人都曾经有过一段美丽的梦景，这时候都被笛声唤起了，㈱于是全沉默着，沉醉在回忆中。 **《家》**

彼らも異様な感じに誘われて、わずらわしい現実を忘れさせられるように思った。誰もが昔の夢を思い出して沈黙し、淘然として追憶の中に酔う。 『家』

[41] ㈧在这件事上，维娜站在了革命的一边，她立了功，㈱所以我们发展她加入了红卫兵。” 《轮椅》

この件で維娜は革命の側に立つことを証明したから、あたしたちは維娜を紅衛兵に迎えることに決めたわけ。 『車』

[42] 卫老婆子叫她祥林嫂，说是自己母家的邻舍，㈧死了当家人，㈱所以出来做工了。《彷徨》

衛ばあさんは、彼女のことを祥林嫂とよんでいた。なんでも、衛ばあさんの実家の隣りのもので、亭主に死なれたために、奉公に出ることになったそうだ。 『彷徨』

[43] ㈧道静知道王妈见过她的亲妈，㈱所以才想起来问她。 《青春》

道静は王媽が、じぶんの生みの母親に会ったことがあるのを思いだし、それでかの女に、問いただしてみようと思いついたのだった。 『青春』

[44] ㈧已经过了下班时间了，㈱陆文婷告辞出来。 《北京》

正午をとっくに過ぎていたので、陸文婷は暇をつげて部屋を出た。 『北京』

[45] ㈧林道静变坏了，㈱她们已经断绝往来了 《青春》

林道静は悪党になってしまったので、すでに絶交していると告げようと思ったが… 『青春』

[37]～[45]の前後節のアスペクトは「Ｐ已然⇒Ｑ已然」になっている。接続表現の使用に関しては、使用されるものと使用されていないものの２種類がある。使用されているものでは、因果関係を表す“所以”、動的因果関係を表す複文のみに使用できる“于是”、接続機能のみを果す“就／便”のいずれかの使用例が見られる。接続表現が使用されていないものは、接続表現が使用できないわけではなく、省略されていると判断できる。

前掲諸例では、アスペクトマーカーの使用は、「時態助詞（アスペクト助詞）」、「時態語気助詞（アスペクト語気助詞）」、「時態副詞（アスペクト副詞）」、「準時態助詞（準アスペクト助詞）」のいずれのものも観察される。一文では、アスペクトマーカーがふたつ用いられる場合、ふたつ以上用いられる場合のいずれかのケースもある。

［37］［39］［41］［42］［45］の前後節にはそれぞれアスペクトマーカーの“了”が使用されている。“了”には様々な機能がある。「時態助詞」であり、完成相または実現相を表す“了”を“了$_1$”と呼び、「時態語気助詞」で、主に実現相を表す“了”を“了$_2$”と呼ぶ。“了$_1$”と“了$_2$”によって表されているアスペクトはよく似ているため、よく合わせて用いられることが多い。“了$_1$”と“了$_2$”が同一文に使用される場合、“Ｐ了$_1$⇒Ｑ了$_2$”と“Ｐ了$_2$⇒Ｑ了$_1$”のいずれの場合もありうる。また、“Ｐ了$_1$⇒Ｑ了$_1$”“Ｐ了$_2$⇒Ｑ了$_2$”のような使い方もある。［37］は“Ｐ了$_2$⇒Ｑ了$_1$”、［39］［42］は“Ｐ了$_1$⇒Ｑ了$_2$”、［41］は“Ｐ了$_1$⇒Ｑ了$_1$”、［45］は“Ｐ了$_2$⇒Ｑ了$_2$”といった組み合わせになっている。

［38］では“Ｐ了$_2$⇒Ｑ下去”のふたつのアスペクトマーカーが使用されており、「準時態助詞」の“下去”は継続相を表すマーカーである。［40］では“Ｐ了$_2$⇒Ｑ在”が使用されており、“在”は進行・持続相を表している。［43］では“Ｐ过⇒Ｑ起来”が用いられており、“过”は経歴相を表し、起来は開始相を表している。［44］では従属節と主節を合わせて、四つのアスペクトマーカーが使用されている。“Ｐ已经＋了$_1$＋了$_2$⇒Ｑ出来”「時態副詞」の“已经”は完成・実現相を表しており、「準時態助詞」の“出来”は行為の完成を表している。

6.3.2.2“Ｐ已然 ⇒Ｑ未然”型

［46］“(因)现在到了决定胜负的关头，(結)所以我们要开这个会来研究……”　《青春》

「･･･いまや勝敗を決する正念場にさしかかっているのです。それで、わたしたちは、この会議をもって研究したいと･･･」　『青春』

［47］“(因)我离开家好几个月了，(結)咱们党小组得赶快开会，･････”　《金光》

「おらあ何カ月も留守にしてたから、早えとこ党小組の会合を開いてくれ･･･」『輝け』

［48］这是你姨妈的女儿，(因)你姨妈到很远很远的地方去了，(結)所以她从今天开始，就要住在我们家里。　《当》

彼女はおばさんの娘です。おばさんは遠く遠くにあるところに行ったので、今日から、彼女は我が家で暮らさなければなりません。（拙訳）

［49］ 发生海湾危机以来，中东地区的情况发生了很大的变化，(因)一些国家已经加强了与伊拉克的关系，(結)因此美国应该考虑改变其中东外交政策。《当》

湾岸危機が発生して以来、中東地区の状況には大きな変化が生じた。一部の国はイラクとの関係を既に強化していたからには、アメリカは中東に対する外交政策を変えることも考慮すべきである。（拙訳）

［46］～［49］の前後節のアスペクトは「Ｐ已然⇒Ｑ未然」になっている。この種の文において、“所以”“因此”などのような「静的因果関係」と「動的因果関係」を表すものは、アスペクトの制約を受けず、依然として使用されるが、「動的因果関係」を表す“于是”はアスペクトの制約を受けやすい。上掲各例のいずれも“于是”と置き換えられない。例えば、［46］の “所以” を“于是”に置き換えると、自然の文でなくなる。

［46’］＊“现在到了决定胜负的关头，于是我们要开这个会来研究……”

“所以”“因此”は多様な因果関係を表す複文で使用できるが、“于是”の使用範囲はそれらより狭い。陆庆和(2000) [13] では、“于是”の機能と用法について次のように指摘されている。

“于是”一般不连接表示未然的结果句。（中略）“于是”一般后接动态句、用于叙述。一般因果句则既可后接动态句、也可后接静态句。

“于是”は一般に未然を表す結果節をつなぐことができない。（中略）“于是”は一般的に動態節が後接し、叙述に用いるが、一般の因果関係を表す複文の場合は、動態節が後接するだけではなく、静態節も後接できる。

陆庆和(2000)によると未然のアスペクトである場合、継起関係を伴う因果関係を表す“于是”の使用に適さないことがわかる。

「Ｐ已然⇒Ｑ未然」型におけるアスペクトの表現形式は従属節に完成・実現相を示す“了”“已经”といった完成・実現相を表すマーカーが観察されるのに対して、主節に“要”

“就要”“得”“应该”といった未然のアスペクトを表すマーカーが観察される。前掲各例における従属節と主節のアスペクトマーカーの使用は、[46]では“Ｐ了$_1$⇒Ｑ要”、[47]は“Ｐ了$_2$⇒Ｑ得”、[48]は “Ｐ了$_2$⇒Ｑ就要”、[49] “Ｐ已经＋了$_1$⇒Ｑ应该”といった組み合わせになっている。

6.3.2.3 “Ｐ未然⇒Ｑ已然”型

[50] (因)也许她知道你和媚媚的事，(結)因此，她紧张起来。 《文》

あなたと媚媚のことを知っているかもしれないので、彼女はそれで緊張してきた。

（拙訳）

[51] (因)她猜来猜去猜到这可能是宋郁彬从中缓冲的缘故，(結)于是她对宋郁彬的印象就更好了。

《青春》

いろいろ考えてみたが、これは宋郁彬があいだにたって、事を荒だてないように、とり計らったためらしい。そこでかの女は、宋郁彬に対して、さらによい印象をもつようになった。 『青春』

[52] 不过，(因)也觉得再在旧题目上斗个唇枪舌剑是没有意思了，而且，大概也想到“不理睬”倒是对于像这种人的最大的侮辱，(結)于是由冯梅生再开口，找些不相干的事随便谈着，打算把空气弄得热闹起来。 《霜》

しかし、(因)いまさら先程の問題をむしかえして口論する気もなかったし、また、「黙殺」することがこういう手合に対する最大の侮辱であることに気づいたからか、(結)馮梅生が当りさわりのない話を持ち出して、その場の空気を盛り上げようとした。『霜』

[53] (因)可能因为人太多，(結)她紧张了。 《作家》

人が多すぎるためか、彼女は緊張した。 （拙訳）

[54] (因)我的行为举止可能超出了某些人的“正常逻辑”，(結)所以他们猜错了我的身份。

《当代》

私の挙動はある人たちの“正常なロジック”を超えてしまったためか、彼らは私の身分を当てそこなった。 （拙訳）

[50]～[54] では、因果関係を表す接続表現の“因此”“所以”“因为”と、因果関係を表すと同時に継起関係も表す“于是”のいずれの使用例も含まれている。“Ｐ未然⇒Ｑ已然”

型の場合、主節は「已然態」であるため、接続表現の使用は制約を受けにくい。“于是”の使用範囲は“因此”“所以”などより狭いが、後接する結果節が「未然態」でなければ、使用が許される。

「Ｐ未然⇒Ｑ已然」型におけるアスペクトの表現形式は従属節に判断・推測の副詞の“也许”“可能”“大概”が使用されることによって、従属節は未然のアスペクトと判断できる。主節は「已然態」であるため、完成・実現相を示す “了$_1$”、主に実現相を示す“了$_2$”と、進行・持続相を示す“着”、開始相を表す“起来”が用いられている。上掲諸例の前後節のアスペクトマーカーの使用は、[50]では“也许Ｐ⇒Ｑ起来”、［51］では“可能Ｐ⇒Ｑ了$_2$”、［52］では“大概Ｐ⇒Ｑ着＋起来”、[53]では “可能Ｐ⇒Ｑ了$_2$”、[54]では“可能⇒Ｑ了$_1$”といった表現形式になっている。

6.3.2.4 “Ｐ未然⇒Ｑ未然”型

［55］(因)戏曲改革是改革旧有社会文化事业中的一项严重任务，不可避免地将要遭遇许多复杂的问题，(結)因此，戏曲改革工作必须有步骤地进行。《当》

演劇の改革は、旧社会の文化事業を改革する中での重要な任務であり、多くの複雑な問題に出会うことは避けられない。そういうわけで、演劇改革を行うためには一歩一歩進めなければならない。（拙訳）

［56］“长庆兄，那个陈什么的，(因)恐怕还是读书人呢，说不定也是中过举的，所以，他的党徒大概也是念书的。･･･”《霜》

「長慶君、いま話の出た陳なんとかいうのは、挙人かどうかは知らんが、どうも学問をした人間らしいな。だから、一味の連中もその手合いだろう。・・・」『霜』

上掲２例は“Ｐ未然⇒Ｑ未然”型であり、従属節と主節が未然のアスペクトになっているため、接続表現を用いる場合、因果関係のみを表す“因此” “所以” などが使用できるが、継起関係を伴う因果関係の“于是”の使用が許容されない。理由は、既に前述したように、主節が「未然態」であれば、“于是” がそのような言語環境に適さないからである。

“Ｐ未然⇒Ｑ未然”型におけるアスペクトの表現形式については、当然前後節ともに未然アスペクトを示すマーカーが使用される。ここで挙げた２例はそれぞれ“Ｐ将要⇒Ｑ必

須”、“说不定Ｐ⇒Ｑ大概”といった副詞のみによってアスペクトを表す表現形式になっている。

6.4　まとめ

6.2 と 6.3 では日本語と中国語の時間表現と接続表現の使用との関わりについて考察してきた。両言語は時間表現との関わり方が違っており、日本語の接続表現の使用は、テンスと関わっているのに対して、中国語はアスペクトと関わっているということが明らかになった。

日本語の場合は、従属節と主節のテンス形式によって組み合わされた４種類のパターンと接続表現の使用との関わりについての検討を通して、次のような結果が得られた。

従属節のテンス形式が過去形であれば、接続表現の使用は制約を受けにくく、「から」「ので」「ため(に)」のいずれかの使用も許容される。一方、従属節のテンス形式が基本形であれば、「から」「ので」の使用は当然許容されるが、「ため(に)」の使用は、従属節の述語の性質、または時間関係の順序によっては、許容されない場合がある。また、前後節の時間関係は従属節と主節のテンス形式または述語の性質によって異なってくることも明らかである。「から・ので・ため（に）」の使用とテンスとの関わり方を表で示すと、次のページの【表 39】のようになる。

【表39】　日本語の接続表現の使用とテンスとの関わり

分　類	テンス		述　語			時間関係	接続表現使用可否			備考
	従属節	主　節	従属節		主　節		から	ので	ため（に）	
			述語の性質	持続性	述語の性質					
「Ｐタ⇒Ｑタ」型	過去形	過去形	状態性	あり	状態性	従属節・主節同時	○	○	○	
				なし		従属節事態先行	○	○	○	
			動作性	－	動作性	従属節事態先行	○	○	○	
			状態性	あり	動作性	従属節・主節同時	○	○	○	
				なし		従属節事態先行	○	○	○	
			動作性	－	状態性	従属節事態先行	○	○	○	
「Ｐル⇒Ｑタ」型	基本形	過去形	状態性	あり	状態性	従属節・主節同時	○	○	○	
				なし		従属節事態先行	○	○	×	
			動作性	－	動作性	従属節事態先行／従属節が主節に後続	○	○	×	「ため（に）」は継起性に従うため、時間的なプロセスの制約を受ける。
			状態性	あり	動作性	従属節・主節同時	○	○	○	
				なし		従属節事態先行／従属節が主節に後続	○	○	×	「ため（に）」は継起性に従うため、時間的なプロセスの制約を受ける。
			動作性	－	状態性	従属節事態先行	○	○	×	
「Ｐル⇒Ｑル」型	基本形	基本形	状態性	あり	状態性	従属節・主節同時	○	○	○	
			動作性	－	動作性	従属節事態先行	○	○	×	
			状態性	あり	動作性	従属節・主節同時	○	○	○	
			動作性	－	状態性	従属節事態先行	○	○	×	
「Ｐタ⇒Ｑル」型	過去形	基本形	状態性	あり	状態性	従属節・主節同時	○	○	○	
				なし		従属節事態先行	○	○	○	
			動作性	－	動作性	従属節事態先行	○	○	○	
			状態性	あり	動作性	従属節・主節同時	○	○	○	
				なし		従属節事態先行	○	○	○	
			動作性	－	状態性	従属節事態先行	○	○	○	

中国語の場合は、従属節と主節におけるアスペクトの組み合わせは 4 パターンあり、各パターンにおいて接続表現の使用が制約を受けるか否かについて検討し、次のようなことが判明した。

因果関係のみを表す“所以”“因此”“因为”などはいずれのパターンにおいても用いることができるが、因果関係を表すと同時に継起関係も表す“于是”は主節のアスペクトを受ける場合がある。“所以”“因此”“因为”などがアスペクトの制約を受けないのは、それらが静的因果関係と動的因果関係のいずれも表す機能があるからである。一方、“于是”が使用される場合、主節のアスペクトが「未然態」であれば許容されなくなる。それは、“于是”は動的因果関係を表す機能のみを持ち、静的因果関係を表せないからである。中国語の接続表現の使用とアスペクトとの関わり方を表で示すと、【表 40】の通りである。

【表40】　中国語の接続表現の使用とアスペクトとの関わり

分　類	従属節	主　節	使用可能な接続表現		備　考
			種　類	代表的接続表現	
“P已然 ⇒ Q已然”型	已然形	已然形	因果関係を表す／継起関係を伴う因果関係を表す／接続機能のみ持つ	“因此”、“所以”、“因为”、“于是”、“就 / 便”	最も典型的な因果関係複文であり、前後節とも事実であることについて述べており、極めて客観的で、接続表現の使用範囲が広い。
“P已然 ⇒Q未然”型	已然形	未然形	因果関係を表す	“因此”、“所以”、“因为”	動的因果関係を表す“于是”は、結果節（主節）が「未然態」であると、アスペクトの制約を受け、使用できない。
“P未然 ⇒Q已然”型	未然形	已然形	因果関係を表す／継起関係を伴う因果関係を表す／接続機能のみ持つ	“因此”、“所以”、“因为”、“于是”、“就 / 便”	結果節（主節）が「已然態」であるため、接続表現の使用は制約を受けにくい。
“P未然⇒Q未然”型	未然形	未然形	因果関係を表す	“因此”、“所以”、“因为”	動的因果関係を表す“于是”は、結果節（主節）が「未然態」であると、アスペクトの制約を受け、使用できない。

注

第 6 章

[1] 井上(1976：169-199)参照。

[2] 岩崎（1995:70）参照。

[3] 寺村（1982:192）参照。

[4] 岩崎（2001:28）「ノデ・カラ節事態と主節事態の時間的前後関係について」参照。

[5] “了，着，过”は動態助詞と呼ばれている。“了”は、「完結」を意味する語である。“着”は、動詞の後ろに用いられ、動作の進行中あるいは状態の持続中を表す。“过”は、動詞の後ろに用いられ、動作の完了、あるいはかつてこのような出来事があったということを表す。龚千炎（1995）参照。

[6] 龚千炎（1995:41-42）参照。

[7] 邢（2001:59-60）参照。

[8] 于(2000:133-134) 参照。

[9] 寺村(1984:212)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版 参照。

[10] 岩崎(1994:108) 「ノデ節、カラ節のテンスについて」参照。

[11] 龚千炎(1995:71-108)参照。

[12] 大河内（1967:5）参照。

[13] 陆庆和(2000:43-44)参照。